

# 館所蔵「鉄瓶」資料について（平成13年度ふるさと交流館年報掲載レポート）

今井 真司\*

## 1 はじめに

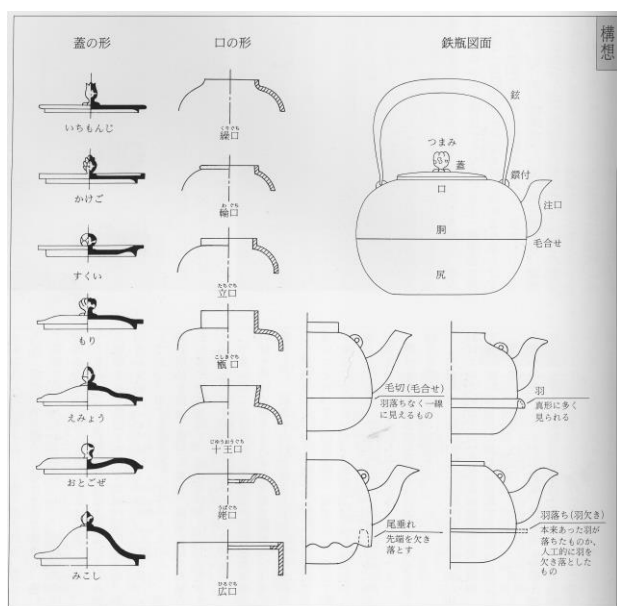
現在、下川町ふるさと交流館には、町民より寄贈された鉄瓶が27点収蔵されています。これらの資料は平成14年2月16日～24日の間、当館の第19回企画展「鉄瓶～湯を沸かす道具～」において展示しました。本報告では各資料について展示に伴い調査した資料データについて紹介します。

## 2 鉄瓶とは

鉄瓶は飲用の湯を沸かす鑄鉄製の注口と鉦をもった道具のことです。いつ頃誕生したのか不明ですが茶釜の一種に『手取釜』という注口と鉦の付いたものがあり、これが鉄瓶の原形になったと考えられています。また鉄瓶という名称も江戸時代後期には古文書に記されていますので、この頃には庶民の間に鉄瓶が普及し始めたと考えられます。広く普及したのは幕末から明治になってからです。

## 3 鉄瓶の部分の名称

鉄瓶の各部分の名称や種類について、南部鉄器協同組合編「南部鉄器 その美と技」によると次のように分類できます。



「南部鉄瓶 その美と技」より

○鉦（つる）－取っ手の部分。細長い鉄板を丸めて中空とした「袋鉦」、鉄の棒を曲げてつくる「むく鉦」に分かれます。

○鑲付（かんつき）－鉦を胴体に取り付ける部分。鉦の先端を二つに割り鑲付の穴に差し込んで止める「遠山鑲付」、鬼面など別の部材で連結する「座付き鑲付」、鉦を鉦でとめる「耳鑲付」、鉄鍋の鉦のようにはめ込んでとめる「鍋鑲付」に分かれます。

○蓋（ふた）－鉄瓶に水をいれる口。蓋の形には、いちもんじ・かけご・すくい・もり・えみよう・おとごぜ・みこしなどがあります。

○鉄瓶本体－この部分の名称は「口」・「胴」・「尻」に分かれます。「胴」と「尻」の境目は「毛合せ」と呼ばれ、鉄瓶の胴型と尻型を合わせた部分です。

○つまみ－蓋をつかむ部分。「鑲付」・「注口」とともに「種物（たねもの）」と呼ばれます。

○口（くち）－蓋をのせる部分。口の形にも、縁口（くりぐち）・輪口（わぐち）・立口（たちぐち）・甕口（こしきぐち）・十王口（じゅうおうぐち）・姥口（うばぐち）・広口（ひろぐち）などに分かれます。

○注口（つぎぐち）－鉄瓶から湯を注ぐ部分。この部分は素焼きの型を作ってから鉄瓶本体の型に合わせて鑄造します。

## 4 鉄瓶の形と文様

鉄瓶の形については多くの種類がありますが、堀江浩著『南部鉄器』によると南部鉄瓶はおよそ5種類に分けられるようです。

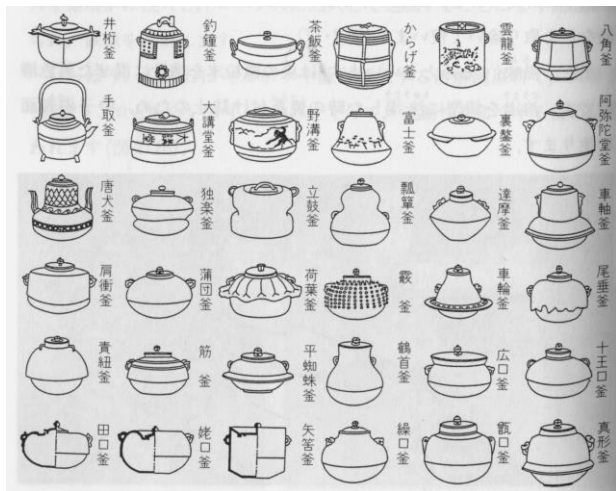
### ①茶の湯釜の形の鉄瓶

- ・阿弥陀堂釜（撫肩のすっきりとしたもの）
- ・雲龍釜（風炉用の筒釜で雲龍の模様がある）
- ・尾垂釜（胴の下部が不規則に欠けているもの）

### ②茶の湯釜の形にとらわれない鉄瓶

- ・鉄鉢形（僧侶が托鉢の時に用いる応器の形）
- ・棗形（茶器の棗のような形）
- ・南部形（尾垂で羽欠きが施されるもの）

- ③身近な物を形どった鉄瓶
- ④動物、植物を形どった鉄瓶
- ⑤伝統を打ち破った鉄瓶



堀江皓「南部鉄器」より

(元図は「日本美術大系 金工」講談社)

鉄瓶の文様については、「絵文様」と「肌文様」に分けられ、「絵文様」は花鳥風月、動植物など数多くの種類があり、「肌文様」によく見られるブツブツは「霰文（あられもん）」などがあります。

## 5 鉄瓶の主要な生産地

鉄瓶の生産地については、岩手県盛岡市・水沢市の南部鉄器が有名ですが、その他にも山形県山形市の山形鋳物、埼玉県川口市の川口鋳物、茨城県常陸太田市の太田てつびんなどがあります。その全てを明らかにすることはできませんでしたが、以下主な生産地について説明します。

### (1) 南部鉄器（盛岡市、水沢市）

南部鉄器とは岩手県盛岡市と水沢市で作られる鉄器の総称です。江戸時代までは両地域は別々の藩で独自の活動をしていました。大正時代、旧南部藩主が創設した「南部鑄金研究所」でデザインや工法の研究・普及が行われ、昭和34年（1959）には両産地の組合によって岩手県南部鉄器共同組合連合会が組織され、昭和50年には「伝統的工芸品産業の振興に関する法律」にもとづく伝統的工芸品として全国第1号の指定を受けました。

盛岡市（南部藩）の鉄器の始まりは江戸時代にさかのぼります。当時南部藩では藩主南部重直が江戸から釜師五郎七清行を招いて、領内で産出する砂鉄を使った茶釜を作らせたのが始まりで、その後も鈴木家綱、有坂茂衛門ら釜師を招き、彼らを保護して茶釜や鉄瓶など工芸品の鋳物が発達しました。

水沢市（伊達藩）の鉄器の歴史は、平安時代末期に当時の領主藤原清衡が近江の国（滋賀県）から鋳物職人を招き、武具や仏具を作らせたのが始まりで、その後日用品の鍋、釜、鉄瓶が作られてきました。

### (2) 山形鋳物（山形市）

山形での鋳物製造の始まりは平安時代末（1050年頃）、源頼義が安部頼時を征伐した際に鋳物師が住み着いたのが始まりだとか、室町時代初め延文元年頃（1356）に斯波氏の山形平定の時とも言われますが、実際に銅町として体裁を整えたのは斯波氏の子孫、最上義光が藩主であった文禄元年（1592）で、馬見ヶ崎川の北方対岸、羽州街道沿いに銅町を設けて鋳物職人を集めました。

その後、最上氏の後、藩主となった鳥居氏のもと、鋳物が続けられ、寛永の頃には山形の鋳物師を代表して小野田虎之助が真継家より綸旨を受けるなど権威や特権を得るようになり、また山形が出羽三山（羽黒山、湯殿山、月山）への参詣で賑わい鋳物が広く知られるようになりました。

明治時代になると御用鋳物師としての特権や仏具などの需要が少なくなり、鋳物職人の多くは機械部品の生産へと変わりましたが、一部は伝統工芸の茶釜や鉄瓶を製造しています。

山形鋳物という呼び名は、明治以降に他の地域の鋳物と区別するために名付けられたようです。

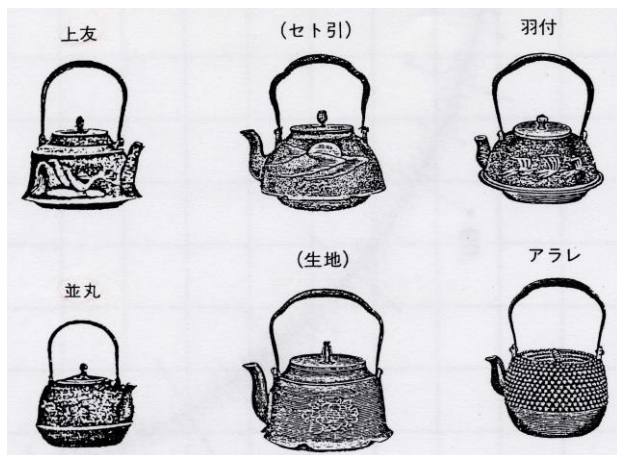
### (3) 川口鋳物（埼玉県川口市）

川口で鋳物が始められた頃は不明ですが、大消費地江戸への日用品の供給地として元禄頃（1688～1704）には鍋、釜、鉄瓶、風呂釜などが製作されていたようです。幕末には大砲や砲弾など大量の武器製造を担当し、明治時代に入ると「キュポラ（溶解

炉)の町」として鑄物業が発展しました。

川口の鑄物業の特徴は、江戸の間屋が原料や燃料など資材を前貸して、鑄物師から製品を納入させる制度です。また鑄物師の職人組織も、親方の下多くの職人が分業し生産しました。

川口で生産された鉄瓶の種類については、三田村佳子著「川口鑄物の技術と伝承」によると、「東京鉄瓶」と称され、ハネツキ・ジョウトモ(上友)・チュウトモ(中友)、ナマル(並丸)などの種類がありました。大きさ(容量)も一升から二斗まで各種ありました。特に北海道へは八升、一斗と大きめの鉄瓶が出荷されたことが記されています。また川口の鉄瓶の特徴としては、『スソビラキ(裾開き)の鉄瓶が代表的』と記されています。



三田村佳子「川口鑄物の技術と伝承」より

#### (4) 太田てつびん(常陸太田市)

常陸太田市で鑄物が始められたのは、建武年間(1334~35)にさかのぼると言われます。その後明和5年(1768)、寛永通宝久字銭の鑄銭を行う頃には、職人が3,000人、炉が100基の大きな集団となりました。幕末の天保7年(1836)には水戸斉昭の命により、太田の御用鑄物師、斎藤助右衛門、塩原弥次衛門が異国船警護のための大砲の鑄造を行っています。明治時代の初め頃には7軒の鑄物業者がありましたが、昭和40年代には1軒になり現在では全てなくなりました。

### 6 鉄瓶を直す~鑄掛屋~

現在は鉄瓶や鍋・釜など鑄物製品は穴があいたり

破損すると新しく買い換えますが、ちょっと前までは鍋釜は高価なものだったので、修理をして大切に使いました。この鑄物を修理する業者は「鑄掛師(いかけし)」、「鑄掛屋(いかけや)」といいます。「鑄掛師」と呼ばれる職人は店を構えた人で、「鑄掛屋」は各家を回って庭先で修理をした人です。

鉄鑄物の修理の方法には、鉄とよく絡み合う銅や白目という錫と亜鉛の合金を溶かして穴をふさぎました。特に鑄掛屋は長い天秤棒に箱フイゴや、詰める金属、炭、坩堝、粘土など下げて各家庭を回り、庭先に炭を盛って臨時の鍛冶場をつくり、フイゴで火を大きくして坩堝に銅などの材料を入れて溶かし、穴のまわりに粘土で囲みを作ってそこに溶けた金属(湯)を流し込んでふさぎました。

### 7 各資料について

(1) 収蔵No.56 寸法: 全体高(鉷を含めた長さ)



36.9 cm、本体高(蓋のつまみから底までの長さ)24.8 cm、幅(本体の最大直径)31.4 cm。形: 全体は川口鑄物の「上友」・「中友」

に見られる「スソビラキ」で、口は「立口」と「甌口」の中間で、蓋は「すくい」形である。文様: 正面が草原とウサギ、裏面は草原に太陽又は月と雲が描かれている。銘: 「光雲」。寄贈者: 斎藤晃繁

(2) 収蔵No.79 寸法: 全体高24.9 cm、本体高15.1



cm、幅19.0 cm。形: 全体は六角形、口は「立口」、蓋は「かけご」で、素材は銅製、蓋に「龍文堂造」の銘

がある。文様: 六面の内、正面と裏面の各々2面には文様があり、正面が木立の上に遠くに寺院の屋根

と塔の上が見え空を鳥が舞う絵柄で、裏面は低木の中に動物がいる絵柄である。銘：「照？堂」、これは屋号「照光堂」の盛岡市照亦製作所の製品と思われる。寄贈者：林勝一

(3) 収蔵No.109 寸法：全体高 31.3 cm、本体高 22.4 cm、幅 29.1 cm。



形：全体は川口鑄物の「上友」・「中友」に見られる「スソビラキ」で、口

は「立口」と「甌口」の中

間で、蓋は「すくい」形である。文様：正面がススキと日本家屋、裏面は「波と舟？」が描かれている。

銘：「星龍」。寄贈者：梅坪秀夫

(4) 収蔵No.140 寸法：全体高 40.2 cm、本体高 26.3 cm、幅 31.0 cm。形：全体は



川口鑄物の「上友」・「中友」に見られる「スソビラキ」で、口



は「立口」と「甌

口」の中間で、蓋は「すくい」形である。

文様：正面が蛙と草、裏面は蓮の葉が描かれている。銘：「○に七」その後は判読

不能。寄贈者：古川時太郎

(5) 収蔵No.445 寸法：全体高 26.5 cm、本体高 16.8 cm、幅 20.1 cm。



形：全体は末広形の一種だが胴の丸みがない。口は「広口」

で、蓋は「いちもんじ」で

ある。文様：正面には「創立満十年記念下川火防衛生

婦人會」の文字が入り胴の上部に雷文が一行ある。

銘：「南部 南盛堂製」。寄贈者：小笠原信

(6) 収蔵No.802 寸法：全体高 27.9 cm、本体高 13.5 cm、幅 19.2 cm。



形：全体は平丸形、口は「姥口」、蓋は「かけご」の一種

で、素材は銅製、蓋に「大正 14 年 10 月 龍文堂造」の銘がある。文

様：不明。銘：「龍文堂造」。寄贈者：田辺正重

(7) 収蔵No.860 寸法：全体高 29.0 cm、本体高 17.7 cm、幅 18.4 cm。形：全体は



末広形、口は「広口」で、蓋は「いちもんじ」である。

文様：正面には「壽」の文字が入り、胴上部に雷文が一行あり、裏面には「上名寄開拓三十周年記念」の文字が入る。銘：判読不能。

寄贈者：清水与三治

(8) 収蔵No.865 寸法：全体高 25.9 cm、本体高 18.2 cm、幅 18.4 cm。



形：全体は尾垂形、口は「甌口」で「第一回国勢調査記念」の文字が入る。蓋は「もり」の

一種であり、裏には「北海道 上川郡名寄町」の文字が入

る。文様：正面に北海道から九州までの日本地図が描かれている。

銘：「南部鐵瓶 照光堂」、盛岡市照亦製作所の製品と思われる。寄

贈者：安原俊江

(9) 収蔵No.1055 寸法：全体高 35.3 cm、本体高 22.4 cm、幅 29.8 cm。形：全体は丸形で、口は「立口」、蓋は「いちもんじ」です。文様：正面に松が描





かかれている。銘：判読不能。  
寄贈者：山下邦広

で、蓋は「かけご」である。文様：正面に竹が描か  
れている。銘：「南部?? ??」と南部鉄器であ  
るが詳細不明。寄贈者：矢野秀

(10) 収蔵No.1689 寸法：全体高 25.8 cm、本体高  
15.3 cm、幅 17.5



cm。形：全体は筒  
形で、口は短めの  
「立口」、蓋は「い  
ちもんじ」である。  
文様：正面に竹が  
描かれ、裏面には

「国勢調査記念 昭和三十五年 下川町」の文字が  
入る。銘：「南部 三?堂」、これは屋号「三蔵堂」  
の南部鑄造工業所の製品と考えられます。寄贈者：  
河合嘉平

(13) 収蔵No.3804 寸法：全体高 18.0 cm、本体高



10.5 cm、幅 15.4 cm。故郷  
の岐阜県で結婚式のお神酒  
を入れるために使用した鉄  
瓶である。形：全体は「手  
取釜」様であり、尻には三  
つ足がある。口は「姥口」、  
蓋は「もり」で薄い銅製である。文様：全体に「霰」  
が付いている。銘：なし。寄贈者：加藤藤治

(14) 収蔵No.3805 寸法：全体高 18.7 cm、本体高



11.3 cm、幅 15.7 cm。故郷  
の岐阜県で結婚式のお神酒  
を入れるために使用した鉄  
瓶である。形：全体は「手  
取釜」様であり、尻には三  
つ足がある。口は「姥口」、  
蓋は「もり」で薄い銅製である。文様：全体に「霰」  
が付いている。銘：なし。寄贈者：加藤藤治

(11) 収蔵No.3523 寸法：全体高 36.8 cm、本体高  
22.9 cm、幅 29.2



cm。形：全体は川  
口鑄物の「上  
友」・「中友」に見  
られる「スソビラ

キ」で、口は「立口」と「甌  
口」の中間で、蓋は「すく  
い」形である。文様：正面、  
裏面全体に菊が描かれている。銘：「〇に七」その下  
は判読不能。寄贈者：矢野秀

(15) 所蔵No.4810 寸法：全体高 25.5 cm、本体高



16.6 cm、幅 17.5  
cm。形：全体は  
筒形で、口は短  
めの「立口」、  
蓋は「かけご」  
である。文様：  
正面に竹が描  
かれ、裏面には

「国勢調査記念 昭和三十五年 下川町」の文字が  
入っている。銘：「南部 三?堂」、これは屋号「三  
蔵堂」の南部鑄造工業所の製品と考えられます。寄  
贈者：中内伊勢吉

(12) 収蔵No.3524 寸法：  
全体高 29.5 cm、本体高 18.8  
cm、幅 19.8 cm。形：全体は



竹を模した筒  
形で、尾垂の裾  
が広がってい  
る。口は「広口



(16) 所蔵No.4860 寸法：全体高 25.4 cm、本体高  
15.6 cm、幅 20.0 cm。形：全体は「尾垂形」の一種



であるが羽欠きはない。口は「甌口」で雷文風の文様が付けられている。蓋は「いちもんじ」である。文様：全体に桜の花と葉が

付けられている。銘：「南部 金秀堂」、水沢市の金秀堂鑄造所製である。寄贈者：中内伊勢吉

(17) 所蔵No.4861 寸法：全体高 27.0 cm、本体高



16.8 cm、幅 22.9 cm。形：全体は川口鑄物の「上友」・「中友」に見られる「スソビラキ」で、口は「立口」と「甌口」の中間で、蓋は「すくい」形である。文様：正面が富士と月、裏面は

「鳥」が描かれている。銘：なし。素材：ジュラルミンと思われ、戦時中か戦後まもなくに鉄不足のためこの手の鉄瓶？が作られたのだろうか。寄贈者：中内伊勢吉

(18) 所蔵No.4862 寸法：全体高 38.0 cm、本体高



23.6 cm、幅 31.2 cm。形：全体は川口鑄物の「上友」・「中友」に見られる「スソビラキ」で、口は「立口」と「甌口」の中間で、蓋は「すくい」形である。文様：正面がブドウ

と蔓、裏面は「ヒョウタン」が描かれている。銘：「義」の文字が入る。素材：ジュラルミンと思われ、戦時中か戦後まもなくに鉄不足のためこの手の鉄瓶？が作られたのだろうか。寄贈者：中内伊勢吉

(19) 収蔵No.4863 寸法：全体高 31.4 cm、本体高 20.7 cm、幅 25.9 cm。形：全体は川口鑄物の「上友」・「中友」に見られる「スソビラキ」で、口は「立口」



と「甌口」の中間で、蓋は「すくい」形である。文様：全体に梅状の模様が描かれている。銘：不明。寄贈者：中内 伊勢吉

(20) 収蔵No.4864 寸法：全体高 25.1 cm、本体高



15.4 cm、幅 17.5 cm。形：全体は「尾垂形」の一種であるが羽欠きはない。口は「甌口」で雷文風の文様が付けられている。蓋は「いちもんじ」である。文様：正面にユリか何かの花が描かれている。銘：「南部 南盛堂製」。

寄贈者：中内伊勢吉

(21) 収蔵No.5076 寸法：全体高 32.8 cm、本体高



21.0 cm、幅 24.2 cm。形：全体は「尾垂形」の一種であるが羽欠きはない。口は「甌口」で雷文風の文様が付けられている。蓋は「すくい」で、

「北海道土地改良区連合会上川支部・改組記念」の文字が入る。文様：全体に桜が描かれている。銘：「南部?? 岩鑄」、盛岡市岩清水鑄造所製である。寄贈者：安原俊江

(22) 収蔵No.5141 寸法：

全体高 28.7 cm、本体高 17.0 cm、幅 17.2 cm。形：全体は筒形の一様で下部が広がり末広形ともいえる。底は平らである。口は「広口」、蓋は同心円の帯状の模様がある。文様：正面に「贈 昭







和29年3月31日 下川町農業協同組合」の文字が入り、裏面には柳と蛙が描かれている。銘：「南部 南盛堂製」。寄贈者：安原俊江

(23) 収蔵No.6086 寸法：全体高 25.5 cm、本体高



16.4 cm、幅 19.8 cm。形：全体は「尾垂形」の一種であるが羽欠きはない。口は「甌口」で雷文風の文様が付けられている。

蓋は「かけご」で、外周に雷文、中心に霰文が描かれている。文様：全体には少し多きめの霰文が描かれている。銘：「南部 隆清堂」。寄贈者：西沢シゲコ

(24) 収蔵No.6616 寸法：全体高 25.3 cm、本体高



15.5 cm、幅 16.4 cm。形：全体は筒形で、口は「広口」、蓋は「いちもんじ」で「昭和二十六年 下川町開基五十周年功労者表彰記念」の文字が入る。文様：全体に葦戸

状の文様が描かれている。銘：「南盛堂製」か。寄贈者：相沢忠久

(25) 収蔵No.7039 寸法：全体高 33.9 cm、本体高



22.5 cm、幅 29.0 cm。形：全体は川口鑄物の「上友」・「中友」に見られる「スソビラキ」で、口は「立口」と「甌口」の中間で、蓋は「すくい」形である。文様：正面が「魚」、裏面は不明。

銘：不明。寄贈者：古屋義晴

(26) 収蔵No.7040 寸法：全体高 35.5 cm、本体高



22.4 cm、幅 28.8 cm。形：全体は川口鑄物の「上友」・「中友」に

見られる「スソビラキ」で、口は「立口」と「甌口」の中間で、蓋は「すくい」形である。文様：不明、銘：「八に〇」。寄贈者：古屋義晴

(27) 収蔵No.14399 寸法：全体高 20.9 cm、本体高



12.4 cm、幅 17.5 cm。結婚式のお神酒を入れるために使用した。形：全体は「手取釜」様であり、尻には三つ足がある。口は「姥口」、蓋は「もり」で薄い銅製である。文様：全体に「霰」が付いている。銘：なし。

## 8 結語

今回の資料調査をとして、漠然と見ていた「鉄瓶」について、短期間の調査とはいえ多くの情報を得ることができた。ただ、調査方法等、参考文献の検索等不備な点も多く残した。今後も折をみて情報収集を進めたい。

### <参考資料>

増山明保編「日本の地場産業<伝統的工芸編>」通産企画調査会 1982

朝岡康二・田辺律子著「日本人の生活と文化7 暮らしの中鉄と鑄もの」ぎょうせい 1982

佐々木俊介、大石慎三郎他「全国の伝承 江戸時代 人づくり風土記(3)ふるさとの人と知恵 岩手」社団法人農山漁村文化協会 1988

佐々木俊介、大石慎三郎他「全国の伝承 江戸時代 人づくり風土記(9)ふるさとの人と知恵 栃木」社団法人農山漁村文化協会 1989

南部鉄器協同組合編「南部鉄器協同組合設立四〇周年記念

事業 南部鉄器 その美と技」岩手県南部鉄器協同組合  
連合会 1990  
佐々木俊介、大石慎三郎他「全国の伝承 江戸時代 人づ  
くり風土記(6)ふるさとの人と知恵 山形」社団法人農  
山漁村文化協会 1991  
石野亨著「図説・日本の文化をさぐる⑥ 鑄物の文化史—銅  
鐸から自動車エンジンまで」小峰書店 1992  
北海道開拓記念館監修「北海道の民具」北海道新聞社 1993  
石野亨著「鑄物五千年の足跡」日本鑄物工業新聞社 1994  
佐々木俊介、大石慎三郎他「全国の伝承 江戸時代 人づ  
くり風土記(11)ふるさとの人と知恵 埼玉」社団法人農  
山漁村文化協会 1995  
三田村佳子著「川口鑄物の技術と伝承」聖学院大学出版会

1998

小田流之著「シリーズ日本の伝統工芸 第3巻 金工品<  
南部鉄器>」株式会社リブリオ出版 1999

小泉和子著「昭和台所なつかし図鑑 コロナブックス 37」  
平凡社 1999

堀江皓著「伝統工芸品シリーズ 南部鉄器」理工学社 2000

E. S. モース著、斎藤正二、藤本周一訳「日本人の住まい」  
八坂書房 2000

常陸太田市「常陸太田市史 通史編 上」

常陸太田市「常陸太田市史 民俗編」

※ 下川町ふるさと交流館学芸員